

西田 孝司(松原市文化財保護審議会)



▲阿保神社鳥居前の「阿保親王住居址」碑



▲阿保親王社(阿保神社境内)



▲阿保神社本殿の背面扉(阿保5丁目)阿保神社提供。



▲阿保親王像(奈良市不退寺蔵)『奈良県指定文化財第10集』(昭和45年)より転載。発見された「束帯天神図」(阿保神社蔵)▶



阿保神社で発見された天神図と
実例の少ない本殿背面扉の存在

平安時代前半、右大臣の菅原道真が大宰府(福岡県)に左遷されました。その途中、道明寺(藤井寺市)に居た叔母の覚寿尼に暇乞いをするため、京都から難波を経て、三宅や阿保を通り、これら

の地で休息したと伝えられています。その伝承から、のち天神さまとなった道真を祭神とする天満宮が祀られました。それが、屯倉神社(三宅中四丁目)や阿保神社(阿保五丁目)です。両社は江戸時代、天満宮とよばれていました。屯倉神社には、道真が腰掛けたと伝わる「神形石」が安置されています。文久二年(一八六二)九月、妻屋氏が顕彰した石碑が建っています(「歴史ウォーク」31)。

ところで、阿保神社が天満宮から今のように現社名を称するようになったのは、明治時代以降のことです。社名の由来は、平安時代初期、五十一代平城天皇の皇子である阿保親王が政争にまきこまれ、河内国丹比郡田坐とよばれていた同地に別宅を設けたと伝わることによります(「歴史ウォーク」23)。六歌仙の一人として有名な在原業平は、阿保親王と伊都内親王の間に生まれた五男です。

阿保神社では、祭神の菅原道真を祀る本殿に並んで、北側に摂社の阿保親王を祀る親王社も合祀されています。親王社は昨年、補修されましたが、その際、祠の中に大切に置かれていた菅

原道真を描いた掛軸が見つかりました。

今年のお正月、阿保神社拝殿に、この道真画像がお披露目されました。発見当時は、傷んでいたことから修復され、参拝者の前によりみがえったのです。

画像は、「束帯天神図」とよばれます。貴族の正装である束帯姿で、袍とよぶ黒装束をまとい、冠をかぶっています。束帯着用の時に右手で持つ細長い薄板の笏も描かれています。また、天神さま(道真)の背後には、松と梅も配置されています。これは、道真が九州に流された時、京都にあつた道真の居宅に植えられていた松と梅が道真を追い、飛んで行こうとした「飛松」「飛梅」の説話から描かれたものです。

道真は屋敷の庭木のうち、日頃から愛でてきた梅の木・桜の木・松の木と別れを惜しみました。その時、梅の木に語りかけて詠んだ句が「東風吹かば にほひをこせよ 梅花 主なしとて 春を忘るな」です。

桜は枯れましたが、梅と松は道真を追って京都から飛来しました。松は、今の神戸市須磨区板宿で根を下ろしました(飛松伝説)、梅は道真の居る大宰府まで飛んで行った(飛梅伝説)と伝わります。道真の背後に、松と梅が描かれています。落款や署名がなく、いつ、誰が描いたかはわかりませんが、穏やかな顔や降に描かれています。江戸時代以降に描かれたと思われる。

全国で、天満宮はおよそ一万二〇〇〇社あるといわれます。京都市の北野天満宮が、全国天満宮の総本社に位置づ

けられています。

阿保神社本殿は、一間社流造で、銅板葺です。江戸時代前半の十七世紀前期頃に建てられたと推察されています。流造は屋根の流れをそのまま延長したもので、わが国で多くの神社が採用しています。

本殿は覆屋で保護されていますが、ここで注目されるのが、本殿背面にも扉があることです。本殿背面に両開きの棧唐戸を設けています。

発見された建築学・日本建築史を研究される黒田龍二さん(神戸大学名誉教授)によると、本殿背面に扉があることは、神社本殿でも数少ないと言われています。岡山県の吉備津神社本殿(比翼入母屋造)や北野天満宮本殿(八棟造)には背面中央に扉があることを紹介されています。しかし、黒田さんは阿保神社本殿の一間社流造に設けられた背面扉は、当社以外には知らないと言われています。

黒田さんは、いつ設けられたかについて、近代以降ではないかと推察されています(同氏『阿保神社本殿覚書』阿保神社ホームページ掲載(令和四年(二〇二二)四月))。

私も、山野美江宮司のお祓い後、本殿裏の扉を見させていただきました。阿保神社には、拝殿天井に江戸時代以降に書かれた四十八枚もの花卉図があったり、本殿裏の御神木の太櫓がそびえるなど、人々によく知られています。神社では、菅原道真や阿保親王・在原業平父子を顕彰する事業を進められ、にぎわいをもたらしています。